

緒言

予嘗て北米に遊學中、偶カリフォルニア大學附
 屬の圖書館に於て在外米國領事の報告書を繙
 就中南米諸邦に駐在する諸領事の報告頗る
 予の注意を喚起せり、時は明治二十年の頃なり
 爾來數年の見聞は愈南米大陸の吾人に向て
 大に爲すあるへきを確む、遂に自ら行て詳細を
 探尋するに決し、之を松岡謙野田音三郎峯島儀
 天の諸波に謀る、諸氏熱心に賛同す、即ち南北相
 連絡の方法を設け、昨年三月十八日米國郵船に
 搭て桑港を出發す、

秘魯は條約國なれば先づ此國へ到り南大陸の概況を調べ、以て專意研究の方面を定めんと欲し、パナマの滯留を六日に減じ、更に英國の郵船に乗てカヤオ港に達せしは翌月二十九日也。秘魯國自身か事業を初るに適すると、且事情探尋に付旅行の不便統計書類の欠乏及予の西班牙語學に不熟練なるとは、大に滯在の時日を長ふしたれば他國遊歴を廢して同國內に五ヶ月間止ることなりぬ。貿易或殖民をなすに於て案外愉快の望多きを發見したりと雖、少資金によつて事業を開初す

るの不得策を知れり、彼の國は日本人か奮て大に爲すへき處、而て左程の困難を感せずして其成功を期すへければ、之は當る者須く其計畫を大にすへし、而て予は有力家に謀り以て希圖を實行せんと欲し、此頃歸朝せしと雖、遠隔末聞の南國人の偶之を知る者は不幸なる彼の日秘礦業會社の落膽的始末ある而已、依て視察の大要を録して世の有志家に配つ、其詳細に至ては事業遂行の手段に屬すれば之を口述に譲る

明治二十七年十月九日

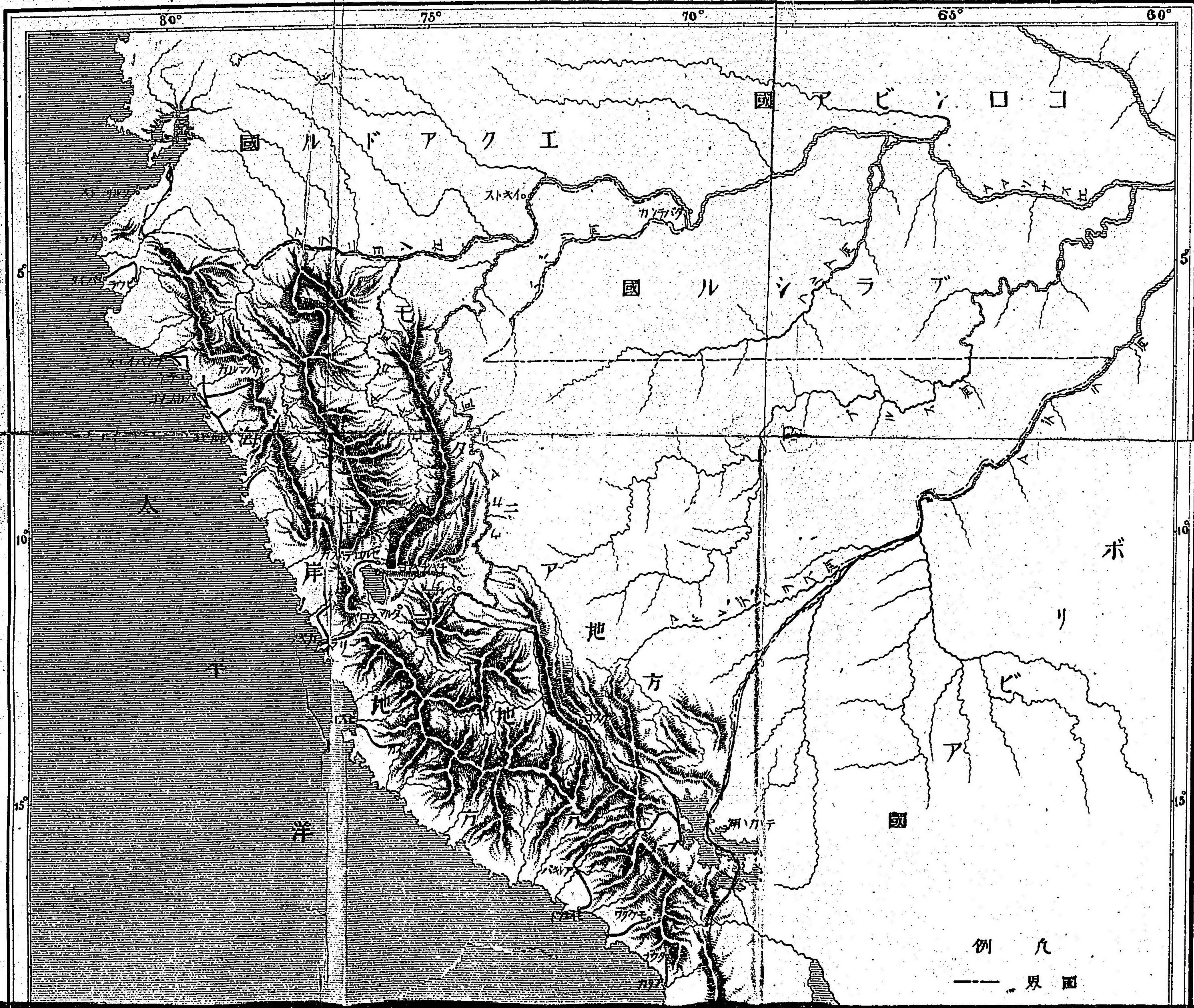
於東京

四

青柳郁太郎

秘魯事情目次

地理	一	丁
歴史	十一	丁
礦業	十九	丁
貿易	三十九	丁
殖民	五十三	丁
ナヤンナヤマヨ、ペレネー一兩殖民地探檢記	七十九	丁
日秘兩國修好通商航海條約	百七	丁
	五	



80° 75° 70° 65° 60°

5
10
15

5
10
15

國 ル ド ア ク エ
國 ア ビ シ ロ コ

國 ル シ シ ラ ア

ボ

地 方

國

例 凡

—— 界 固

カ

ス

カ

ア

カ

人

岸

十

洋

丸

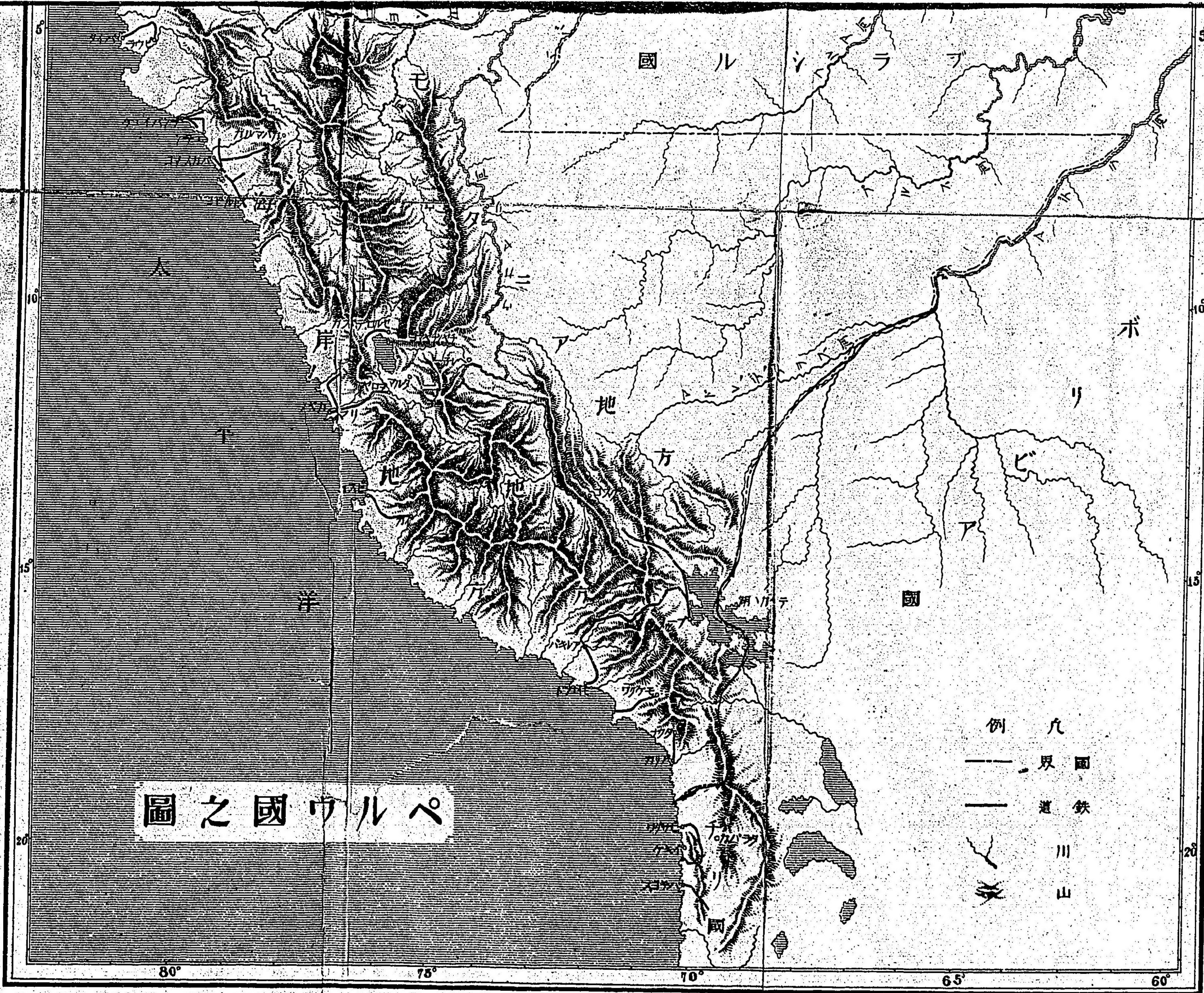
地

湖

川

川

川

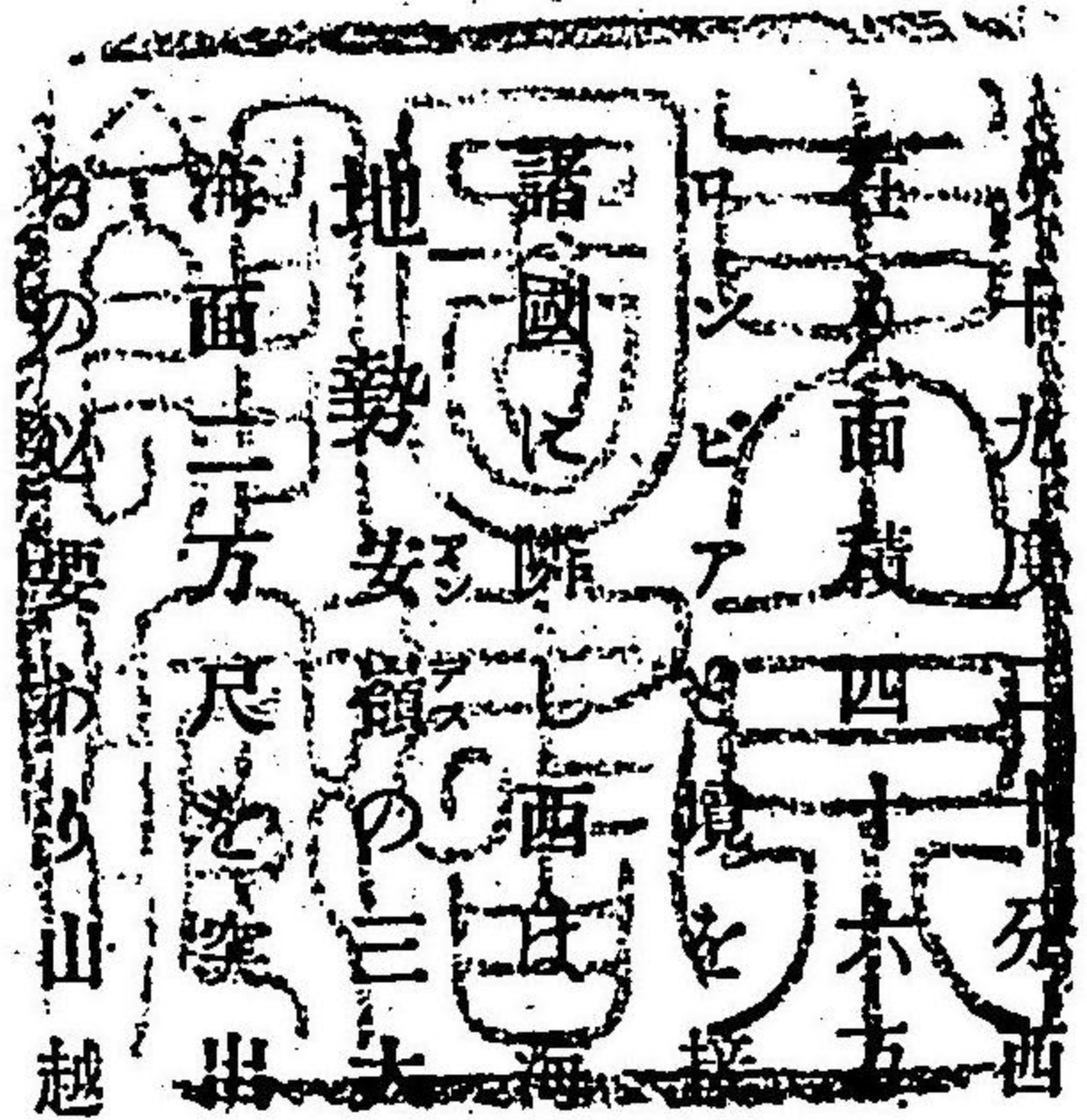


ペルウの國之圖

- 例
- 國界
 - 鐵道
 - 川
 - 山

80° 75° 70° 65° 60°

地理



位置 秘魯は南米大陸の西部に位し、南緯三度二十一分よ
 西經六十九度より八十一度二十分の間
 面積 四十六万三千七百四十七方哩、北方エクアドル、コ
 ロンビア、ブラジル、ボリビア、南ボリビア、チリ
 と接し、東は大西洋に面す
 諸國との間に西は海峽、南は太平洋に面す
 地勢 安嶺の三ヶ所、脈國の中央に連亘し、巍々たる高峯往々
 あり、海抜三万尺を越す、故に東西を通行するもの此山脈を横
 断す、其の必要ありし山越しの鉄道二ヶ處に通す、其一は漸く登て
 一万五千餘尺、即ち富士の絶頂よりも尙高き處に達す、去れ
 は國內氣候風土を異にするとも甚し、大別して西部中央東

部の三となす、

二

西部 (海岸地方) 安嶺の西脈を東の境として太平洋岸諸州を稱す、南北直線一千哩に涉り幅三十哩乃至六十哩、大抵砂地にして降雨稀なり、氣候熱く、砂漠諸處に散在すと雖も、四五十の河川安嶺の泉流或は溶雪を導て太平洋に注ぐ、溪畔の原野自ら灌水の便を得て農業盛なり、砂糠木棉米葡萄等の輸出品は大概此地の産出に係る、

中央部 (山國) 海の水面上五千尺乃至一万四千尺の高處に位し、山脈に沿て幅四五十哩東南より西北に驅る地方を稱す、氣候の寒暖は地の高低に由て異なると雖も、以て中帶の植物を産すへし、芋牧草麥黍等は其農産物、牧畜頗る行はれ、礦泉礦山甚た多く、方今輸出の礦物は勿論古來秘魯をし

て著名ならしめたる無數の金銀及水銀は大概此地方に採掘したるなり、

東部 (森林地方) 安嶺の東脈に沿ふ無限の森林より延てアマソナス幾河に及ぶ、モンタニアと通稱せらるゝ地方は即是なり、産物は珈琲、護謨、幾那皮、染料、金屬、其他熱帶植物の數枚舉に遑わらず、地廣漠探險家の未だ足を入れざる處其大部分を占む、幸よ長江四千哩、水路歐州の大市場に達するの利便あれば、其天富は勤勉敢爲の移住民を得て大に開發するを得へし、

人口 千八百七十六年の調査に基き、其後チリ國の占領に歸せるタクナ、タラバカ二縣を除て算するときは二百六十二萬人なり、然れどもアマソナス幾多支流の水邊文明の徳

三

澤に浴せざる蕃民にして此數に入ざるもの大凡十六萬人
あるへし、即ち全國の人口二百七十八万とせば大過なから
ん
人種 印度及白哲の二人種にして、印度人は銅色荒髪丈甚
高からざるも体格逞しく多く山裡の僻地に住す、白哲人は
血統を西班牙民族に引き、秘魯征服以來繁殖したるもの其
多數は海岸地方に住す、雜婚の風行るゝより都會には其孰
へも属せる雜種の男女數多あり、他の歐州人及支那人は大
概寄留籍に安し歸化するもの稀なり、黒人は往時奴隸とし
て亞弗利加より輸入され、先年パナマ運河工事の中止以來
業を失て同地より移住するもの少からず、されど單純の勞
働者のみなれば何の勢力もなし

四

リマ府人口(千八百九十一年)

男	四萬九千八百五十人
女	五萬四千百〇六人
合計	十萬三千九百五十六人

人種別

白哲人種	四萬七千六百四十五人
但此中印度人雜種の色稍々白きを合有す	
印度人	一萬八千六百六十八人
黒人雜種	二萬五千四百八十一人
支那人	四千六百七十六人
黒人	七千四百九十四人

右國別

五

秘魯人 九萬一千六百四十六人

他國人 一萬二千三百十人

リマ府は秘魯の首府、商業の中心、即ち白人種多く、銅人種少き所以なり、此の割合を以て全國を推測すべきにあらず

言語 西班牙語一般に行はると雖も、山間の僻地固有の言語を用る土民少からず、舊都クスコ近傍にはケチューア語行るゝか如く、此處彼處七八種の言語尙存遺す

宗教 天主教は其國教として他宗の公拜は法律を以て禁す、先年國會議場に於て信仰の自由を説き之に關する法律を修正せむと欲せし議員あり、議固より容れられずして止めり、後ち其人南地に旅せしとき嘗て邪説を唱し故を以て

某村民の惡む所となり將に其謀殺に遇んとせり、人民平常寺院の前を過るに必ず帽を脱て先づ敬禮す其の信仰心頗る厚きに似たり

政体 共和政治にして議會上下兩院あり、大統領は四年毎に改撰し、被選者の資格に財産年齢の制限有り、雖、撰擧權は廿一歳以上或は其年齢に達せざるも已に結婚したるものにして文字を知るか又は多少の財産あるものに普及す
陸海軍 常備軍總て二千七百四十九人、海軍は老艦二艘共に用をなさず、チリ國との戰爭に大概其破壊する所とあり復た軍備擴張を圖らざるに似たり

國庫歲出入 (千八百九十三年即昨年度豫算)

歲入 七百二十七萬九千三百九十二ソール(一ソ

一ルは殆ど銀貨一圓に相當す

歳出

六百三十九萬五千四百七十三ソール

十四年前までは、硝石、烏糞の收入餘ありければ、國庫常に豊富なりき、戦争に敗て、此財源を失てより、政府の貧窮憐むに堪へたり、海關、礦山、酒、煙草は現今主たる税源なり

貨幣 金銀銅の三種にして、金貨は五ソール、十ソール、二十

ソール、銀は五仙、十仙、二十仙、五十仙、一ソール、銅は一仙、二仙の圓貨なり、然れども其金貨は時の相場によりて昇降し、余の滯留せしとき、二十ソール金貨は銀三十五ソールを價したり、故に金貨は嘗て流通さるゝとなく、兩換屋店頭か富家の庫中に蓄藏せらるゝのみ、秘銀一ソール吾九十七錢に相當す、

度量衡 三十余年來メートル法を採用すと雖ども商賣上には尙ほ西班牙法行はる

歴史

歴史を大別して四代とす曰往古時代、インカ帝國、西班牙植
民地、獨立共和國

古代 土民の起源は學者未だ定説なく多く之を亞細亞に
歸するも、其死骸保存、外種々の風習を觀て、或は埃及人種に
推考するものあり、然れども言語風俗容貌の種族によつて
相違あるより、是等の民は諸國より移住し各一方に割據し
たるもの、即ち祖先を異にせりとの説もあるなり、彼等の跡
に遺せる溝渠、城塞、宮殿、石工は當時其農商工業も多少進歩
したるを證せり、然ども國民支離分裂相戰て止さりしによ
りマンコ、カパック出て一統政治の洪業を創め、遂にインカ

朝三百年の基礎を建るとはなりぬ

インカ帝國 マスコ都をクスコに定め民に耕作技藝を教へ、其妻製絲機械の術を授く、徳に感し歸服するもの漸く加る敬稱してインカと言ふ、土音君王の義なり、インカ代を重る十三、終に南チリより北エクアドルを平定し、西蒼海の端より東蔚乎無限の深森に至る迄、縦三千六百哩横三百六十哩、即ち今のエクアドル秘魯ボリビア、チリ及エロンビア、アルヘンティーナの一部分を含有したる一大帝國を建爲するに至る、此間最も見るべきの事業は、クスコよりキト(エクアドル國首、府海上九千五百尺の高地に在り)に到る公道とす、距離一千五百哩殆ど一直線に安嶺の山腹を開通したる大工事にして、インカ數世の經營を待て漸く成功したる者也、

可惜西人の征畧と共に此大道も空く荒廢し、今や遺跡の唯處々に存するのみ

インカ居常驕奢を極め、耳に金環を乗れ、身に寶玉を纏ひ、侍臣宮女千を以て數ふ、出るときは金輿に乗り、死るときは遺骸を日輪廟社の靈前に存置す、政治は君主獨裁、社會は華族平民の二に分る、華族ハ王族、宮女、及國家の元勳より成立ち、殊に學校を設け、宗教上の儀式、王統史、結繩法(當時文字に代用す)等を教ふ、平民は無學無智、唯王命に服従するのみ、財產は共有にして個人獨立の風習なし、音學あり、文學あり、其詩の今に存遺するものあり、計算は十數法にして、一年を十二ヶ月に分つ、工藝は進歩せざるも、農業は發達す、灌水の遺跡甚た見るべきあり、蓋しインカ大に奨勵したるに因る、礦業

は地面の上部を掘り、金銀銅を採りしのみ、水銀鋼鐵の利用を知らず、故に西班牙武士の甲冑に魂を奪はれ遁逃したるなり、商業は極て幼稚よして、賣買の媒介には唐辛、鹽、コカ等の日用品を以てしたり、繪畫織物磁器建築は大に進歩し、廟社宮殿城壘石橋の今に遺存するもの往々旅客をして感嘆せしむ

アメリカ發見 第十五世紀に葡萄牙人喜望峯の廻路により歐洲印度間に初めて海上の交通を開き、大に海運の隆盛を致せり、伊太利人クリストバル、コロン、葡人に諸處の航海に従ひ、頗る經驗を積み、嘗て歐洲より西方印度に直航し得へきを推究す、實驗の資を得ん爲め、諸邦の君王を説けども用られず、終に西班牙女皇の採納する所となり、西歴千四百

九十二年八月三日三艘の帆船を以てパロス港を抜錨す、當時歐人印度の豊富を羨望する甚しく、コロンの西航も印度に達するを目的となし、歐亞間別に新大陸の南北に存在其航路を遮るあるを知らざりしなり、航海數度、西印度諸島及南米大陸の北部を發見したるも、姦人の猜忌妨障に逢ひ、志成らず快々として晩年を暮せり、新世界發見の功かく迄に偉大ならんとは、當時世人もコロン自身も想像せざりしなり、**西班牙殖民地**是より遠征者續出、ダリエン殖民地の主幹者にデ、バル、ポアなる傑士あり、嘗て土族を征し、配下の西人少許金屬の分配に囂々相争へり、會長の子見て大に笑て曰卿等金屬を熱望する如此んば南海に一國あり其金に富めるは西班牙の鐵に於るか如し、何ぞ帆船速に彼國に到らさ

十六
ると、西人秘魯の富を耳にしたるは之を以て初とす、バルボ
ア幾多艱難の後、パナマ地狹を横ぎり、洋々たる大平洋を發
見し、愈彼の所謂南海の一國に達せんとの意を決し、造船其
他の準備に四年を費し、漸く南征の途に上れり、此人亦小人
の猜む所となり、志を遂けず非命に斃る、此時に當て南海富
國の談架空の虚説に非ると稍判明したりければ、此志を繼
て征服の偉業を成し、西班牙赫々の武名を揚げんとするの
念自ら冒險家の胸裡に勃興す、フランシスコ、ピサロは豪邁
果斷の士、二人の同志と語らひ、幾多の艱苦と失望の後、秘魯
北岸に上陸す、偶インカ帝國二分し兄弟内に相闘くの機に
乘し、百七十五人の軍勢を將ひ、敵の三萬と對陣す、ピサロの
偽計、難なく國主を生擒り、全勝を一舉に占め、金銀合計商價

殆んど二千萬弗を掠奪す、尙進て都クスコを占領し、諸處の
廟社官殿墳墓に金銀寶物を畧し、土民をして愈戰慄せしむ、
於此秘魯征服の業成り、西歴千五百三十五年リマック河畔リ
マ府の基礎を立て、爾來國政の中心たり、斯くして西班牙帝
に隸屬する二百九十年、初はリマを本城として、南米の領地
一大守の配下にありしか、邦土廣大に過ぎ統治不便なるよ
り別つて數個殖民地となる、大守は數年毎に交代、西班牙皇
帝の代理人なれば威權の盛大申す迄もなし、稍之と肩を並
ぶべきは天主教の高僧也、部下の僧侶全國に蔓延し、就中リ
マ府の其人口七分の一を占め、勢力時に大守を凌駕せしと
云ふ、此時代に土民は礦農諸業の勞動に苦役され、其修學を
禁せられ、すべて奴隸の悲境に陥れり

獨立北米の獨立、佛國の革命、大に人心を激勵せり、一千八百二十一年殖民地即ち其獨立を宣言し、戰爭數年、終に西軍を破り、共和政体を建つ東南の高地分れて別に一國をなす、ボリビア共和國是なり、千八百七十九年隣邦チリと開戦、諸將内に和せず、嘗て一致の運動なし、敗績又々、遂に和睦を城下に結び、硝石の礦山に富めるタラバカ州を割き、且タクナ、リカの管領權を十年間チリに讓與することとなりぬ、時にア千八百八十三年なり

礦業

西班牙人進路の目的は金銀にあり、而して其所得は冒險に翻る充分なりと云ふへし、殖民地時代に於るアメリカ諸國、金の産出左の如し

ブラシル	六億八千四百四十五万弗
コロンビア	六億八千三百三十三万弗
秘魯	五億六千八百八十四万弗
墨西哥	一億五千三百五十万弗

インカ時代には秘魯人も金銀を宮殿廟社の裝飾に用ゐ、東南高地の諸礦は特にインカ採掘ノ跡明かなり、征服後は西人大に心を礦業に傾け、印度人を役し、或は黒奴を購ひ來り、

以て當年王化の及びし安嶺西脈の諸礦山は、大概多少の着手をなせり
 秘魯は最も銀礦に富む、其有名なるは東南のポトシイ及中央のセルロ、デ、バスコの二礦とす、前者は八億三千四百萬圓を産して已に盡たりと雖ども、セルロ、デ、バスコは採掘すると既に二百六十餘年、而して今尙毎年百五六十萬圓を産出す、此礦山より出したるもの、總計七億五千萬圓に達せり、今後尙幾千を得べき乎、現に數多の組合在來の小仕掛によりて従事す、若し晩近の大道具を以てせば、頗る利益あるべしとて英米人の計畫するものありしが、先づ器械運搬のためオロヤ鐵道延長の必要あり、此鐵路敷設の議國會に容られれどして、事終に止めり、

昔し西人の掘りし銀礦にて業を中廢し、而して更に資本を入るれば、利純を得べきもの甚た多し、半年毎に一借區に付き、十五ソールの税を納むれば、何年捨置くも差支なき國法故、礦主も自然採掘に汲々せざるなり、秘魯現時の状況は勢ひ其資本と労働を、外國に仰かざるへからざるは、此法律も止むを得ざるに出しなり、
 日秘礦業會社のカラワクラ銀山も其一にして、獨逸人へレソの所有に属し、往時西人の着手しあるものなりと雖ども、晩近の大器械を利用せし更に業を興すに足るべきは、熟練技師の保證する所、惜むべし探險委員の懶惰不正なるより、偽報告の大失望を惹起し、主管者は此一頓挫に會て、周章狼狽臨機策を建て、企圖遂行の膽なし、空しく大金を消費して

結局會社の解散となれり此礦山現に獨逸會社(資本七十萬ソール)の採掘する所、一昨年の結果は頗る好かりし、自ら山野を跋渉し、精密なる秘魯地誌を著せる、名士ライモンジ管て秘魯の金礦事業、衰頽の原因を論して、組合不成立なると、水道築造に巨費を要する如き場合に資本の欠乏すると、無用の工事に資本を浪費すると、或は學術的知識の足らざると、の四に歸せり、蓋し是れ獨り金礦事業衰頽の因たるのみならず、一般礦業の發達を総て外人の資本と、熟練に依頼する所以なり、
 銳眼の歐米人は能く此機を察し、近來漸く其歩を進めて、遺利を拾ふに汲々し秘人自らの礦業は、殆んどセル、ロ、デ、バスコの古山に制限さるゝの觀あり、左の表は秘魯國內、一切の礦業會社の資本高判明なるものゝ數あり

秘魯國礦業會社

國別	會社の數	資本金合計
秘魯人	三四	八、九〇〇、〇〇〇ソール
英吉利人	一七	七、五七五、〇〇〇
北美合衆國人	六	六、四〇〇、〇〇〇
伊太利人	九	二、七九〇、〇〇〇
異國人共有	四	一、四五〇、〇〇〇
獨逸人	七	一、四二〇、〇〇〇
チリ人	三	一、一三五、〇〇〇
佛蘭西人	一	一、〇〇〇、〇〇〇
西班牙人	二	六一五、〇〇〇

澳地利人

一

二〇〇、〇〇〇

總計

八四

三一、四八五、〇〇〇

礦産物は金銀銅鉛及鹽石油等を以て主となす、鹽の海陸何れにも得易きは大に礦業に便利なり、石炭礦亦少なからずと雖ども、鉄道の完からざるより運搬に苦しみ大に採掘するものなし、金の東部未開地に發見されへきは、礦士の信する處、而して金剛石其他の寶石は、猶太人の常に東部諸川の上流に住む印度人より交易に由て得る處、モンタニア地方の礦山將來大に望みを屬するに足る、故に進て倦まざる北米の探礦家は漸く此方面に向て來れり、是等の人は自ら資を下して、事業を起すに非ざ、良礦を發見せば借區を政府に願ひ、税を納めて資本家の到るを待ち、其望みに應し借區權

を讓與するを以て營業とす、

石油業は晩近起りしもの、昔インカ時代も其存在を認めしも、當時は點火の効用を知らざりき、三十年前に至り、初めて起業家の注意を喚起し、油井をネグロトスに試掘す、忽然油の湧出七丈の高さに達せしむ之れを蓄ふへき方法を設けざりしより却て損害を蒙りて廢業せり、次て北米人の資本四百萬弗の一大會社を組織せんとしたるものは、南北戦争に妨げられ、又ピウラ石油産出地總体の拂下に關する出願は國法の許さざる爲め、何れも成立せしめて止めり、斯くて現在の両會社タラ、及ソルリトスに起る迄ては北米の石油器械油及英國の石炭南米西岸の市場を獨占濶歩の勢なりき、其産地は秘魯の最北岸ピウラ縣下の海濱に百

二十哩延長す、現今製造場を設け眞に營業するは前記二會社のみ、他は皆お税を納めて借區權を有するに止る、蓋し資本と勞力に欠乏するなり、タラ、のロンドン石油會社は深く眼を東洋の市場に注ぎ、先年既に香港に試み、將に時機を得て大に爲すあらんとす、左も余か數日の紀行を抜萃す彼地の模様を記せばなり

九月二十二日(明治廿六年)早朝北港バイタに着す、船中の退屈は誰れも感ずる所、況んや異郷の獨旅行談友なくては適はざるなり、此行偶べレチー殖民地に居りし英人ジョンソン及び四年前大坂電燈會社に雇はれたる米人技師ゴダードの両氏同行したれば三日の海上面白き話の中に日の暮るゝも惜まれたり、

上陸早速石油會社の代理人ロペース氏を訪ひ、添書を示しタラ、行準備の周旋を頼む、出帆の用意整ひたるを報しければ、午後三時小舟に乗り、港を離る、此邊海波極めて靜穩なるも、吾か舟は体小なれば、頻りに動搖して止まず、船には一條の帆、二人の水夫と予あるのみ須臾にして日暮れ、月出つ、水夫等生魚に石の如き乾パン、之に葡萄酒、唐辛など、添へて夜食を供したれ共、是れは純然たる土人の食物難有けれ共、満腹なればとて、固く斷はる、一と寝せんと毛布に包まれ、横臥を試む、忽ち船と波と撞突して、頭から時ならぬ盪の行水に南柯の夢結はんとして、果さゝると數度、深更に及んで、赤燈を認む、暫くして船タラ、港内に在り、水夫等起て頻りに呼へども、陸上絶へて應ずるものなし、今度是一同大に怒鳴

る港長遂に埠頭に現れ、明朝まで上陸を待つへしと言ふ、如何に小舟の發送を頼むも、彼れ頑として容れず、據なければ命に従ひ、船中に日出を待受くるとせり、水夫等も程なく、高鳴をあし前後も知らぬ風情なれど、夜風寒くして、余は眠むること能はき、遂に荷物を入る、船底を尋ね、何の氣も付かき、是れに飛ひ下りしに一人の水夫に突き當れり、余は驚き彼も亦驚き覺む、主公未だ眠らざるか、茶なりと進せんと、起て火を焚く、此時は既に空腹にして甚寒さを感じ、復た食を擇むに暇なし、飲み終り再ひ元どの穴倉へ探入り、究屈の中何時となく熟睡、太陽の出つるを知らず

二十三日上陸トウエツドル氏ヲ訪フ、氏元と英國の人、米國に歸化しペンシルバニアに住す、當時石油業幼稚の際、初めて善良ある精製所を設置す、後ち魯國に轉し、専ら同業に従事す、嘗て世界第一の石油産出地なるバクレーよりボチヌに至るまで、私費を以て鉄管を敷き、石油を運送すへければ百万エトクルの地所と運輸專業の權を四十年間許可ありたしとの請願を魯政府にあしたるも遂に許されざりき、既にして彼れの銳利ある眼孔は早くも秘魯の北岸に石油礦を發見し、南米の西部に良市場を看破したれば、六七年前英貨二萬磅を投してタラ、チグソートの地所を購ひ、後ち二十五萬磅の資本にて現在の會社を組織し、事業に着手したるは實に四五年前の事あり、余の其門を叩くや、老人は出迎ひハルバルト未だ起きすとして、其の寢室に誘ふ、ハルバルト君はトウエツドル氏の男、ト翁既に老たれば總ての事務を擔當

す、此人とはリマ府にて數々會合したるも、老人とは始てなれば多少氣兼ねたるも、磊落の白頭翁嘗て一面識なき予として家卿に在るの思あらしむ

二十六日三日の滯留、諸製造場は勿論近傍の地所も見盡し必要の談話もなし盡したれば、此日チグリートへ轉ずること、せり、午前翁に誘はれ、木綿種除器械場を見る、年々近傍の土民より綿花を買収、種を除て之をを英國へ輸出す、其の種は壓絞して油を採り、糟粕は畜類の食に供し、総て利用するを得へしと云へり

午後海濱に沿ひ或は連岡の間を過ぎ一時間の後油井林立の邊に出つ即ち地名チグリート石油の元質を地下に汲出す處なり、此處よりタラ、へは鉄管連続し一切の原油を蒸

氣力にて運送す、特に製造所を離れたるタラ、へ設たるは同所船舶出入に便なる良港あればなり、兩所の間は鐵道を敷かんとして今工事中なり

事務所に小息後其管理人と共に近所を徜徉原油汲出方法など尋ぬ、此邊は一体の砂漠水利の便なければ農業振はす、唯此の一業存するのみ、現今汲出しつゝある油井は其數三十労働者六十人あり、大抵印度人にして三四の米人は管理者として之れに混す、事務室の傍らに一商店を設け日用品を販賣す、印度人の給料は總て切手にて渡し、紙片五仙以上各等級を異よし、彼の店にて錢に代用す、酒は日曜の或る時刻に限り賣捌き余日は嚴禁す、無智の愚民漫に逃走或は醉狂の恐れあるに依る、別に玉突臺を設け労働者の遊戯勝手

に任ず、管理者ベニంగాーは米國の人、幼にして國を出て魯國小亞細亞埃及諸國を歴遊したる人なりければ、面白き旅物語に夜の更くるも忘れたり、

此の地の印度人は能く働くやと問ひしに、去るはあり人情の何處も同く、制禦其の當を得ば、彼等は正直にして精勤なり、以前は給料總て月定めなりければ、兎角病氣の申立多く大概偽りなるを知ると雖ども、當人は強情に言ひ張れば始末に困却したりき、一日病氣と稱する輩を一所に集め、茶碗に山盛りせるカストル油を注ぎ、是れは無双の名薬、汝等各一碗つゝ、一油も残さず飲みほすべしと言ひ渡し、順次服用せしむ、此の飲み悪き薬には彼等も閉口せしと見へ、其の後の虚病の種を絶ちあり、又給金の如きも正貨にて拂渡すと

きは、労働者一ヶ月にして逃亡し隣村にて酒に酔ひ容易に歸らず、爲めに不都合を生ずること往々なれば、自造紙幣を以て代用すること、せり、種々工風改良の結果として現今は彼等も帽靴衣服等見苦しからざる勤勉の労働者と云れり云々

此の人ブマと稱する野獸の幼兒を生捕り、既に九ヶ月を経たりとて鉄鎖に繋ぎ庭前より飼へり、形虎に似て力強し、山中にては害を數々人に加ふるより土民恐れて終夜必ず火を焚く、去れど是れは幼少より撫育したるものなれば、好んで人に戯れ、嘗て害意をなし、埃及にては獅子を家に養ふの豪族ありと聞きしか、猛獸も育て様にて柔順に化するなり、
二十七日、汽笛に驚き覺め、起き出れば未だ五時半、數刻にし

てハルバルト君の義弟ラフェール氏來會、直ちに旅装を整へ、海濱に沿て行く、一面の沙漠青草更になし、途に鹽湖を過ぎ、岡腹の小樹ある所にて辨當を開きて休息す、秘人鞍上長方形の毛織敷物を置く、原野に息ふとき之を地上に敷く、坐臥最も妙なり、必竟人口稀薄、客舎數少なければ、旅するものは時を野宿の必要あり、自然此の風習を養ふ所以か、午後漸く内部に向て進む、風無ければ熱暑甚た敷く、背後より焼き付けらるゝの感あり、一岡を踰へて田畑及び數多の山羊に會す、即ちチラ河の流るゝ邊より出になり、夕景アマタベなる村落に達す、別に旅館なければ蘭人某の家に晚餐す、朝來炎天の旅行頗る疲勞したりと雖是れよりバイタ港まで二十一哩、今夜寧ろ涼風に乗して一鞭を加ふるに如かずと

考へ、ラフェール氏には見送りの親切を謝し、道案内として彼の従者を伴ひ、チラ河を渡りて、暗夜其導くかまゝ、疎林の間を潜り何處ともなく走りけり、十時頃明月雲を排して出づ、眼界總て砂茫漠、昨日來騎り續け本日も已に六十五哩を驅り、且つ途中青草の飼ふなく、水さへ夕刻初めて飲ませし程おれば、馬も大に疲れしならん、十一時半バイタに着したるか土地になれされは客舎の探索に迷ひ、此所彼所に彷徨せり、終に一舎を尋ね入て小飲寢に就く

二十八日昨午炎暑を感せしも道理なり吾顔の皮は剝けたり、日光の照らせし側面は最も甚しく、頬骨の邊りは黒く焼かる、ロベース氏に會し閉談數刻、此の日は市内に暮らせり、秘魯石油の發達は晩近の事にかゝるピウラ縣は北部の海

岸にして其の産出地なり、現時タラ、及ヒソルリトスの
 ニヶ所に精製所あり、此の二會社の石油は合衆國の産出を
 南米西部諸國の市場より驅逐せしのみならず、遠く東洋に
 米魯の先入者と争はんと欲す、石油の利用漸く擴まり獨り
 ランプ用も止まらず、揮發油となり、器械油となり、焚き物と
 なり、蠟にすへく、藥を製すべく、就中焚料として薪石炭に代
 用するに至りては余は瀛車に礦石精練所も或ハ其の他の
 器械場にて實際使用して經濟的良結果あるを目撃した
 れは、世に石炭木材の跡を絶つも此の石油の有らん限りは
 不自由なかるべきを信せり
 此の地七年毎に降雨あり、地は肥へたるも平時は沿流地方
 を除き、其他は一切乾燥草も生せず、而して雨降る年は常に

捨て、顧みざる地所へ木綿を作り勞せずして収獲すと云
 ふ

灌水の談久しく米人百万の資本を投し水利を興すの風評
 ありしも未だ實行の運ひに至らず、此の地方産物の最たる
 ものは木綿玉黍にして、夏帽亦名高く上等は一個七八十弗
 を價す

貿易

日本秘魯の兩國通商航海に關する假條約を結て年既に久し、而して未だ嘗て貿易の實を擧げず、條約書をして空しく一篇無用の文字たらしめたるは果して其貿易すへき物品なくして然るか、一は中帶に國し一は熱帶に國す、一方の冬は一方の夏、我は工藝に長して彼に製造なし、假令交換の物品なきも、吾か數多の國産中豈に彼れの需めに應ずるものなき理あらん、其通商せざるは必竟國情を辨せざるによるなり

秘魯は人口少く、且チリとの戦争以來國力頓に萎微し、爲めに裝飾品の購買力は大に減少したり、然れども其外國貿易

は尙一年三千万圓内外に上り、支那の如きすら毎年四五隻の帆船を發し、雜貨、茶米等五六十万圓の國産を輸入せり、吾産物中漆器、陶器、屏風等は多少支那商人に依りて販賣せらるゝも、日本なる名は未だ彼の國商業上に知られざるなり。秘魯は農礦産物を輸出して總ての製造品を輸入す。假令は椅子、机等は愚か棺桶に至る迄て北米數千里の外國より來る、國內良材なきに非らざるも木材を運ぶの道及ひ之れを造るの職工なきなり、故に裝飾品外一般實用品の供給を他國に仰ぐ。

然れども其需用に應ずるには能く彼の事情に通せざるへからず、獨逸人最も此の點に向て機敏なり、彼等は秘人の習慣嗜好を學ぶに用意甚周到、専ら商權の擴張を勉む既に佛人に先し將に英人をも凌ぎ、支那人專賣の物品にまで切込んどせり、本邦の製造家若し茲に鑒み其の期する處を大にし、以て此の競争場裡に入らば一大得意場を發見せん。布哇を経て直航せば海路短かきに非ざるも大平洋上極めて安全の道中、而して去離に於ても之れを歐洲に比し大に得る處あり、且南米の西岸は何れも銀貨國なるか故に、昨年來銀貨の下落は歐洲金貨國との貿易に頗ふる影響を來し、現に余の在留中銀貨暴落の電報に接し、リマ府の商館中には一時閉店顧客を謝絶したるとあり。

日本の西洋的製造品は未だ精巧と稱する能はざるも、是等南米諸國の中下等人民を満足せしむるに充分なり、既に此の地利を有して此の時機に會す、誰か日本は南太平洋岸の

銀貨國に商權を擴張し能はずと言ふ。商權の擴張は未來のことと見るも、今現は吾國商人は奮起一番貿易の端緒を開くべき好機に會せり、即ち日本在來の物産中秘魯人の欲望するものあるか故に之れを彼の國へ輸出する事は是れなり、其需用は如何なる物品あるか左に之れを述べん。

綿布類 毎年百余萬圓を輸入す、木綿縮の如きは需用必ずあらん。

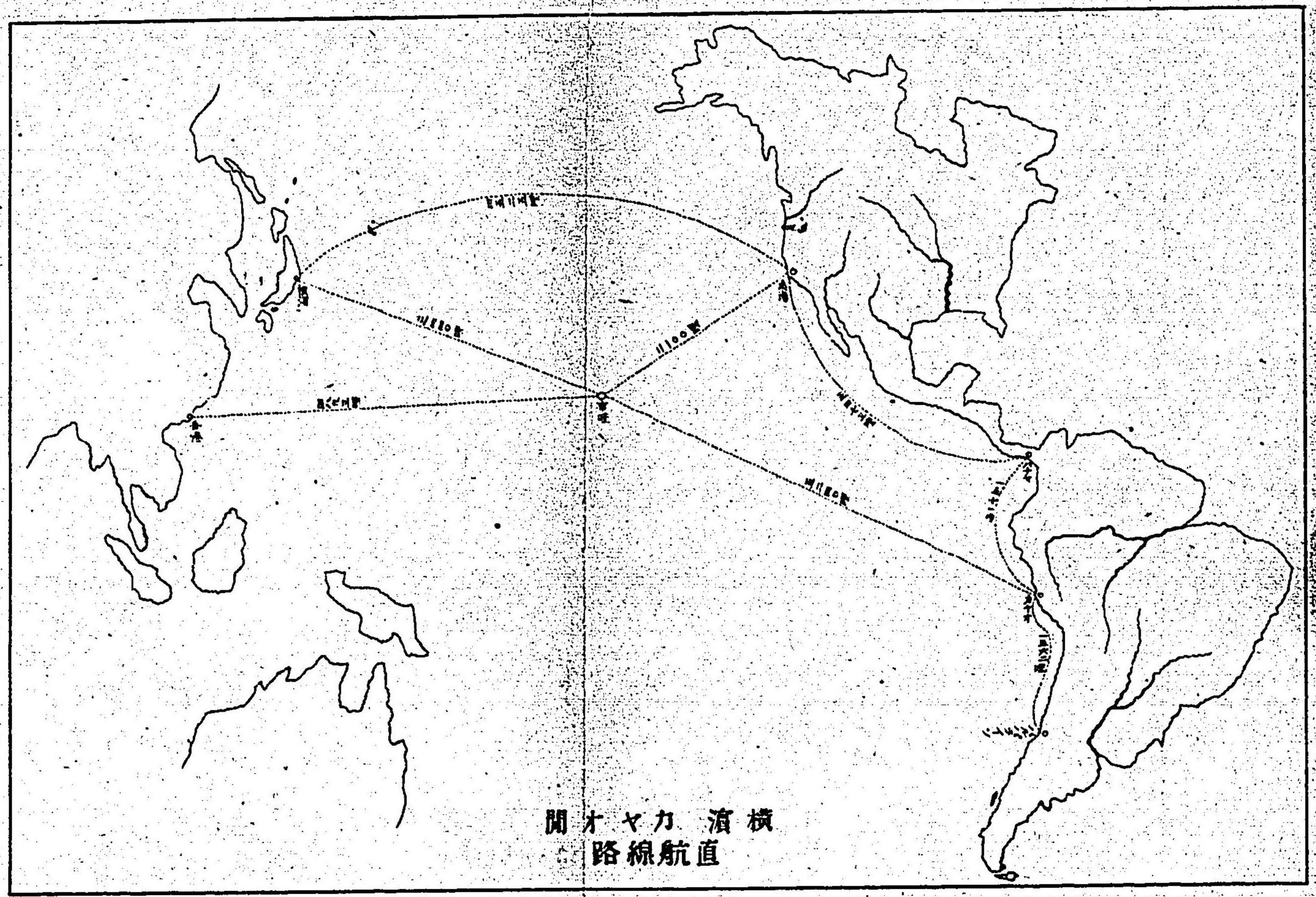
茶 一年の輸入二十萬キロ、即ち税關の判定價十萬圓、盡く支那或は印度茶なり、内ち支那茶十分の八を占む、税關は一キロの價を五十仙と定め其の六割五分を徴収す、即ち一キロ三十二仙五厘の輸入税なり、若し紅綠兩茶を混せ以て日

本茶を紹介せば其の嗜好に適すへし、南米には日本茶絶て無く、茶と云へば支那か英國の産とのみ思ふ際なれば、吾人は此方面に向て茶業家の注意を喚起せんと欲するなり。

絹布類 輸入の最多額者は佛國にして獨逸之次に次ぎ支那第三番に位す、ハンケチのみにて支那より毎年二三萬圓を輸入す、マントと稱し黒縮緬製肩掛ケ類似のものあり、婦女子の寺行き或は外出のとき頭上より着用す、総て支那商人の專賣にして販路頗る多し。

米 國內に北米カロライナ産同種の上等米を産するも、支那印度より毎年六七百萬キロ、即ち四五十萬圓の白米を輸入す、税關は白米一キロの價格を七仙と定め其の二割五分を課税す、玄米は四仙の價格にて一割五分の税なり、但米搗

場に乏き爲め輸入者總て白米を撰ぶ
 礮寸 輸入総額一年六七萬圓、多く獨逸より來る
 草蓆 支那より輸入すると毎年三四萬圓
 石炭 年々四五萬圓を輸入す、英國産最も多く、一トンの
 價十七圓内外なり



リマ府發外國行電信料

壹語

横濱	六ソール十仙
香港、上海	五ソール六十五仙
英、佛、獨、或北米合衆國	二ソール六十五仙
墨西哥	一ソール五十仙
印度	四ソール三十五仙
濠洲	同
カナダ	二ソール七十仙
パナマ	一ソール二十五仙
バルパライソ	七十仙

秘魯貿易表 一千八百九十一年調査

國名		輸 入	輸 出
英 吉 利		六、二八九、三八〇、 ^一 八	五、八一 ^一 、九七三、 ^二 二
獨 逸		二、八六五、七六〇、 ^二 八	一、二 ^一 、一、四五七、〇 ^一
佛 蘭 西		一、五七六、五八七、 ^五 七	三、五四、 ^二 三四、九 ^一
白 耳 義		四六八、九七一、 ^三 七	二六、四七三、 ^八 〇
伊 太 利		四四五、六二四、 ^〇 一	三、六六 ^二 、六 ^五
西 班 牙		一〇九、六一 ^二 、八 ^四	一八七、 ^九 三
北米合衆國		一、三二三、八七五、 ^六 一	二七八、〇 ^一 五、 ^九 七
中央亞米利加		四〇、八五八、 ^六 〇	六九五、五三八、 ^五 〇
支 那		五三九、二七三、 ^三 五	八六、八九九、 ^七 三
印 度		四八、九六五、 ^五 〇	
チ リ		一、一四六、八〇七、 ^六 一	二、二二三、 ^三 七〇、 ^三 五
ボ リ ビ ア		一、一六七、七五〇、 ^三 九	一、〇四〇、 ^八 一一、 ^一 五
エ ク ア ド ル		九二、七九八、 ^四 八	八一三、 ^九 七九、 ^四 五
コ ロ ン ビ ア		四八、二五五、 ^六 八	七〇六、 ^三 四〇、 ^六 七
外 諸 國		一六九、六五六、 ^五 八	八一、〇〇五、 ^五 〇
總 計		一六、三三四、 ^一 七八、 ^〇 五	一三、 ^二 三三、 ^九 五〇、 ^八 四

秘魯國產ノ十萬ソール以上輸出スル物品

品名

價格

砂糖	二、九五三、三六ニソウル
棉花	一、〇五七、九九三
藥草	三四五、八三〇
棉種	一五、六一四六
米	一五〇、二二〇
アルパカ毛	五五七、一八〇
羊毛	三〇四、六五〇
獸皮	二九四、三八七

畜類	一八八、七四六
麥粉	二三〇、五三四
バハ帽	一八三、八六一
葡萄及其他酒類	一〇三、五四一
銀貨	一、四七九、四五六
銀鉛	一、〇二六、四四九
銀碗	九六〇、〇五二
金碗	一〇三、六二三
鹽	四〇四、八一二
コンクレト	一六三、三六〇
護謨	七〇一、〇二〇

既設航路により貨物を送らんとせば、横濱より桑港行大平洋郵船會社汽船に搭載すべし、該社は桑港にてパナマ行汽船に轉載し、パナマ着ノ上更に之れを其接續の特約ある大平洋蒸氣航海會社持船に載み更に南米西岸へ送達す即ち運賃乗客賃を左に記す、但し運賃は總て米國金貨或は之れに相當相場銀貨を以て貨物積込の際に仕拂ふべきものなり

自横濱或香港

品名	量	至	至	至
絹及阿片	一フット立方	一弗七十仙	一弗七十五仙	一弗八十仙
茶、草蓆、煙花、及雜貨	一フット立方	八十仙	八十五仙	八十七仙五厘
米及豆	一トシ即(二千磅)	十七弗	十八弗	二十弗

汽船乗客貨航海日數及距離

航海日數	距離	下等	上等	自横濱 至桑港(北米)	自桑港 至パナマ(ロンドン)	自パナマ 至カヤオ(秘魯)	自カヤオ 至バルパライソ(チリ)
十五日	四千五百廿五海里	英貨十三磅	英貨三十三磅				
二十日	三千四百七十三海里	米金五十弗	米金百弗				
八日	一千五百七十一海里	秘銀四十五 ^{ソール}	秘銀百六十五 ^{ソール}				
八日	一千五百六十二海里	秘銀三十 ^{ソール}	秘銀九十 ^{ソール}				

殖民

移住民獎勵 秘魯政府が熱心に外人移住を獎勵し初めしは西歴千八百四十九年にして、當時移民を誘導したるものへは其連れ來れる數に應し每人三十圓を給與せり、翌年二月以後三年四ヶ月間に上陸せし移住民は

- 支那人 二千五百十六人
- 獨逸人 一千〇九十六人
- 愛蘭土人 三百二十人
- 合計 三千九百三十二人

政府は之に對し每人三十圓即ち十一万七千九百六十圓を支給せり、其後類似の方法により漸く移住民の數を

増し、就中支那人伊太利人の數夥しくなりぬ
 ポスソ殖民地 獨逸人シューツ秘魯に來る翌年、政府偶殖
 民地探險の目的を以てアマソナス地方出征の舉あり、ト
 ルヒヨ港より陸路カハマルカを經ウヤガ河に出て以下
 舟にて旅する譯なり、シューツ其一行よ加はり、親く深山
 廣野を跋渉し深く秘魯東部殖民に適するを感す、政府に
 於て土地は勿論移民の旅費及初の収獲あるまで其食料
 を給與すへきを約せしにより、彼は獨逸へ歸り移住希望
 者を募る、應ずる者忽ち三百人、此一隊カヤオ港へ到着せ
 しは千八百五十七年八月也、直に安嶺を越へポスソ植民
 地へ到る、氣候風土を異にする新世界に木を伐り地を拓
 き新卿里を造爲する困難往々彼等の意想外に出てたり、

一時の艱苦永遠を慮るに暇あらず、彼等は却てシューツ
 を非難するに至れり、超て六年諸事稍整頓するに及て其
 嘆聲は却て感謝狀となり、シューツ盡力の結果漸く彼等
 をして心服せしむ、シューツは實にポスソ植民地の父祖
 其創まりしも榮しも彼あるか爲也、其晩年の手書よ曰く
 余か此事業上得たるものは唯財産と健康の損害而已、然
 れども植民地の繁榮は大に余に満足を與へたりと、ポス
 ソ殖民地は南緯十度に位し、ウアンカパンバ及ポスソ兩
 河に沿ひ、延長八哩、氣候空氣共に好し、住居の獨逸人總計
 四百人、今や皆相當の農家となり、勞働に印度人を使役す、
 創立後二十五年間の統計によれば、毎年の死亡人口百分
 の二強にして、出産は百分の五なり、創業の當時生計の困

難なる風土の不慣なるにも係はらず、生死の割合尙且此の如し、地の植民に適する他を述るの要亦からん。産物の煙草、珈琲、コカ、米、甘蔗、バナナ、木綿、サーサパリラ、カオ、オ及蜜柑、バナ、其他の菓物類あり。ボスソの獨逸人植民地はチャンヂャマヨに於る伊太利人殖民地と共に秘魯政府か過去巨財を投て外人移住を企て其目的を達したる好例なり。支那人移住 支那人の現、秘魯にゐるもの五六萬なり、彼等の續々渡來せしは千八百四十九年、以降二十五年間とす、若し當年死亡或は歸國者を算入して本國を出發せし總勢を數へなば容易ならぬ人員なるへし、其渡航の船中死亡せし者而已にても一二萬の間にあらん。

水旱の災と髮賊の亂に、南部支那の民生計日に艱難あるの時に際し、秘魯に移住民獎勵の法あり、金錢の爲めには人命を何とも思はざる輩には失ふべからざる機なり、エリアスと呼べる人特約を政府と結び、人を支那に遣し、年期八年其間衣食を給與し月給四圓の契約にて、頻りに困窮の廣東人を雇ひ入れ、帆船にて秘魯へ運搬せり、黒人の奴隸の使役に慣れたる秘魯人、是を黄色の亞細亞的奴隸と心得ぬ。渡航日數百日内外、此間に死去するもの總人數百分の十乃至二十、必竟船内待遇の酷あると衛生の不行届なるに因る左に轉載するは當年實地を目撃したる英清兩國人の記録に係る、事西印度ク、島に属すと雖とも、ク、

秘魯も同一の目的方法を以て同時代に支那人を移せり、之れに由て彼を察せは蓋し大過なからん

秘魯帆船コラ號の載來せる支那人二百九十二人中、其百十七人は飲料水不良の爲め船中死亡せり(在アバナ府英國總領事報告)

一千八百五十八年香港より來る五水、澳門より來る十水、汕頭より來る十水、厦門より來る三水、合共一萬六千四百十一名、内女人四十五名船に在て身故するもの三千零二十七名、内自縊者二名、自溺者五名自盡者三名誤溺者五名、鎗斃者六名、跌斃者二名、去て向ふ所知らざる者九名(清人譚乾初著古巴雜記)

其上陸後受くる取扱は如何、茲に支那人自ら迷る所あり

岸に抵て後、之を待つ牛馬の如く、賣て糶寮に入る(此賣買には年期八年の條件付なりと雖ども、一たび糶園よ入れば是も空文たるを免れず、大概一人五六百圓の相場なりしと)日未だ出ずして起き、夜半を過て眠る、食する所は粗粟大蕉、穿つ所は短褐不完、稍命に違ふわれは輕は即ち拳打足踢、重は則ち奴禁刑を施す、或は私に逃て穩匿すれば則ち之を死地に致す

さすが辛棒強き支那人も憤激時に主人を殺し主家を焼き騒動を引起したるとありたり、因順なる清政府も遂に大臣を遣て嚴談に及び、二十五年目に初て其人民の移住を戒禁し且現在留者取扱の改良を致せり、

於此奴隸的移民の道一時杜絶され、勞働者の不足に迫ら

れたれば、秘魯政府は更に其公使をして清政府に説しめ、て曰く秘魯か其富源を開き長足の進歩を志す、一に産業發達に必要な人數を得は即ち足る、若し貴國の餘りある人口を此處に移さは、是れ一舉兩得あり、貴國の人如何に多く秘魯へ來るも北米に於る如き屈辱に遇ふなく、而して勞働上便利なる一大原野は實に彼等を待つ也云々、然れども清政府は先の待遇に懲り頑として復た之に應せざりき

或ハ香港のある商會と結び、秘政府の補助に依り、秘清兩國間の新航路を開き、支那人の無賃渡航を許し、以て其移住を獎勵せんと企てたるも戰亂の爲め事遂に止めり、十年前清政府其使館をリマ府に置き、爾來在留支那人の

待遇も愈前日又優り、漸く獨立農事に従ふもの輩出し、且富農豪商の數も少からざなりぬ、彼等は不知裡一大勢力を蓄積せり、此勢力を如何に用ゐて支那民族の根柢を固め以て大利益を圖るへき乎、之に由て如何に過去二十五年間奴隸視せられし耻辱を澱ぐべき乎、彼等は更に慮を此邊に勞せざるなり、嗚呼文弱而頑陋、嘗て進取活潑の氣骨なし、手固き小商人堅忍ある出稼人、他に復た何をか望まん

モンタニア 支那人は出稼を主意とし、已に拓けたる海岸地方にのみ群居し、而して歐洲人は地理上自國に近き北米或は南米の東岸諸州に良植民地あるより、自ら遠隔の秘魯に來るもの少なし、故に安嶺以東モンタニアと稱す

る千里の沃野は大概天然の儘に存在し、僅に印度人の水流に洗ふ金屬、山野に拾ふ譚謨或は藥草を歐州商人の時々長江を遡て貿易するあるのみ、蓋し是れ一大良殖民地、而して秘魯政府も夙に其森林鬱蒼たる天然園を變て殖産的田畑となさんと欲する所なり、彼のボスソ、チャンチャマヨは僅に其端緒を開きしに止まり而して是等植民地の好果を結びしは即ち愈モンタニア植民事業の多望を證するに足る、乞ふ左に其産物及運路の如何を説ん

モンタニア現時の産物は譚謨を第一とす、製造上需用多し、印度人通常之を山林に求む

コカは海面上五六千尺の暖谷に生長する灌木なり、其乾葉は印度人の一日も欠くべからざるもの、彼等は他の食

物を斷絶するも、此葉あれば即ち數日の勞働に堪ふ、其入るにも出るにも必ず携帯す、蓋し唐辛と共に彼等の廢すべからざる食料なり、藥品コカインは之より製す、カヤオ港輸出のコカイン一年大約二十万圓なり、晚近大に醫術上用ゐらるゝの故を以て益コカの需用増加し其市價を高めたり

幾那皮の俗に秘魯皮と名く、此國其本元なきのみなり、印度人一千三百尺乃至六千尺の高地に培養す、蒔種後一年半六七尺の高さに長し、六歳にして切倒し其皮を採る、毎樹大概乾皮五磅を産す

サルサパリラはアマソナス支流の沿岸地方に長し、染料は山野に拾ふ

木綿、甘蔗、米、藍、珈琲等は新殖民地に隨伴する産物なるへしとは吾人の推測する處、既に或る歐州人種の試作して其地に適するを證せり

秘魯の内地甘蔗を耕すもの砂糖を製せずして酒を造り印度人に販賣するもの多し、却て利純あるに由る、此邊若し甘蔗を作らば自ら之に倣ふに至らん

米は此地方現に供給を隣邦に仰く、米作老練の日本農夫に適當の作物あり

モンタニア地方海濱を隔て遠く山裡に在り、雖ども、天惠の水路枝を八方に張り、以て汽船往復の便利を與ふ、抑アマソナスは四千哩の長江、其流て秘魯國領内にある間マラニヨン江と稱す、二千六百哩の間八百噸の汽船を走す

へく、小汽船おれば尙上流に遡るを得へし、其支流にても數百哩汽船の往來し得へき河少なからず、ウアヤガ河畔ユリマীগワスはイキトスを去る四百五十八哩の港、現に五六百噸の汽船通行しつゝあり、アマソナス江に於るブラシルとの國境は大西洋を距る大凡二千哩なるタバデンガなり、此邊の江幅一哩半、イキトスはそれより少く上て税關のある處、歐州行モンタニア産物の經過する江畔隨一の都會なり

イキトス府人口調 (千八百九十年)

國名

商人、農家、職工、船乗り、技士、醫士、家僕、合計

支那人	六	一	二〇				四	三一
佛蘭西人	九		四			一	一	一五
西班牙人	二		四		一			七
葡萄牙人	九	四	二二				一	四一
澳地利人		二	三					五
獨逸人	四	三	二					九
伊太利人			二	三		一		六

瑞西人			一					一
英吉利人			一					一
北米合衆國人			一		一			二
秘魯人								二九〇五
總計				三千〇二十三				八

(千八百九十一年)イキトス税關ヲ經テ輸出シタル物品

	金額
護 謨	七〇一、〇二〇ソール
パ ハ 帽	五五、九七一
煙 草	五、四〇四
獸 皮	二、七八九
雜 品	一、三六一
總 計	七六六、五四五

官有地下賜 東部は大概官有地にして、未だ政府の測量せざる處多し、モンタニア地方に關する法律に曰く

内外人の區別を論せず、其請願あれば百二十エクタレア(一エクタレアは大凡一町に相當す)以内は縣令に於て割與するを得へく、是より以上は大統領の權利に屬す、而して千五百エクタレア以上は總て國會の許諾を要す

此法律によりて、得たる土地の所有權は之を請願したる一個人或は會社にありと雖ども、下賜の當日より起算して、二ケ年間に地面五分の一を耕作せざるときは、其所有權を失ふものとす

結 論

モンタニアは総て未開の山野にして開拓されたるは僅か
 其一小部分に過ぎざるのみ、而地味大概豊饒最も護謨、コカ、
 珈琲、カ、オ、甘蔗、米、藍、幾那皮、其他藥草及熱帶植物の産出に
 適そ、然ども殖民を成すに當て常に困難を感ずるは産物の
 販路にあり

秘魯國には印度人へ賣酒の禁制無きか故に、モンタニアに
 於る歐州移住民の多數は甘蔗を培養して酒を製し之を印
 度人へ販賣するを以て營業とす、頗る利益ある商法なり、或
 は米を作て近傍土民の需要に應ず、総て是等は地方的販路
 にして區域狭きに似たるも、殖民とて必しも一個處に多人

數集合するに非れば時としては一地方の移住民盡く甘蔗
 を培養して酒を製するの却て利純あるとあらん、而て藍、カ
 、オ、珈琲、護謨等歐州市場へ輸出の必要ある者ハアマソナ
 ス江及瀛船の往來し得へき其支流數千哩を奔流するあれ
 は、地圖面にては不便なる内地に籠閉せらるゝの觀あるも、
 運輸上實際の便利は海濱にあると一般なり、且現今中央米
 州及南米西岸の産物ホーン岬を迂回して運搬するの際、モ
 ンタニア産物は比較上市場接近の地利を占得ず、而て土民
 は性質温順にして馴らすに易く役するに難からず、土着人
 民の嫉惡、又は競争の爲め殖民事業を妨障せらるゝ如き憂
 は万々此地方に有り得へからざるなり
 秘魯の識者夙に人口稀薄國人怠惰、開進の期すへからざる

を憂へ、他の新分子を糺へ以て國富を開發せんと欲し、陰に
 謂らく海岸に支那人を移しモンタニアに歐州人民を植へ
 此目的を達せんと、蓋し支那人は出稼を主とするか故に農
 業の盛なる海岸地方へ向はしめ、モンタニアは森林蔚陶末
 開の豊野なれば永住を期する歐州人を擇しなり、然ども清
 政府は既に其人民の出稼を禁し歐州人亦地理上遠隔の故
 を以て移住するもの少なし、之に加るに十年前の戦敗は大
 に政府の財源をチリ國に奪れたれば、初の如く移民を奨励
 するの資力に乏し
 此時に當て本邦若し出稼を兼たる永住的移民法を設け以
 て事に従はし、獨り邦内有餘の貧困者を將來多望の新大陸
 に移し、比較的到大資本を要せずして大和民族勢力の區域

を擴むるを得るのみならず、宛も秘魯の希望に應ずるあり、彼の國有力者の談論及其殖民史によつて判斷するに、秘魯は事情の許す限り移住民よ對し讓與と保護に吝みざるべし、其何處迄便利を與ふべきは今茲に確言し難しと雖も、も充分なる地面の割與及十年間一切の租税を免する等の條件は之を得る敢て難きに非るべきを信するなり。然とも新に地を拓き物を作るに當ては其收穫ある迄長歲月を要すれば、唯是れ丈の讓與にては大よ吾民を移植し能はざるの事情あらん、幸に秘魯の海岸地方は農業開け甘蔗を培養するの豪農多く、而て彼等は常に勞働者の不足を嘆ちつゝあり、故に吾移住民をして初めの數年間先づ是等の甘蔗園に勞働せしめ、其間各自幾分の蓄金を別途になさし

め、知らざる裡に種代農具及食料を備へ來るの方法を設け而て一方には豫定の殖民地に於て作物の撰擇及培養の方法を研究して怠らずんば、時来て彼等を此處に移すに當り無益事に資本消費の通弊も免れべく、且大に本國より資金流出の額を減少するを得べきなり。被雇人として數年の勞働後心を永住に決し新に地を拓き家を成さんと欲する者二十人中一人に止ると假定するも、二万の勞働者を海濱農場へ送るときは、十年後に廣き田畑を所持して獨立農事に従ふ一千戸の大和民族をモンタニアの沃野に見出さん、即ち吾輩か殖民の適地天下多しと雖ども地の利及殖民地に於る土民の温順且競争心に乏きと加之移住民をして初に自ら其資本の幾分を稼き得る便利

等を備ふるにより、秘魯國は大和民族に向て最良殖民地の一たるべきを信じて疑はざる所以なり

然れども此事を成すに當ては、最初秘魯政府及移住者との約束を結ぶに頗る周到熟練の思慮を要す、初めの舉動は善惡に論なく總て先例となつて後來に影響し、而是等の先例か意外の勢力あるものなるとは殖民事業に經驗ある人の皆是認する處なり、本邦既に北米に布哇に又は南洋に殖民上種々雑多の實驗を経たれば、此經歷を鑒みて大に攻究する處なかるへからず、外人に對し自ら招て其地位を下げ、得られべき利を得ずして止むは愉安姑息者流の陥り易き處、是れ獨り移住民の爲め惜むべきのみならず一般利益の爲め誠に憂ふべきものあり

支那人は他國人に倚て秘魯へ到り奴隸の如くに使役されたり、最初に於る此失策は今に秘人をして支那人なるものは總て奴隸的人種なりとの想像を懐かしめ數にも足らぬ賤民までが動もすれば支那商人を輕蔑するの種となりぬ、南米は大和民族の新舞臺にして吾國は寧ろ文明を誘導すべき位置にあり、且貿易に殖民に大なる利害の後來に關係するものあきは、此方面に向て吾輩は大に世の注意を促すと同時に深く其最初に於る輕舉を戒めんと欲するなり

（Faint, mostly illegible text in the upper right section of the page, likely bleed-through from the reverse side or very light printing.)

チヤンチヤンヨ及ペレチー殖民地探検記

前者は先に秘魯政府及同植民協會の保護指
圖に由て成立したるもの、後者は秘魯會社と
稱する英國資産家の團體が是より大に植民
せんと欲し現に創業の準備に忙しき處なり
明治二十六年八月四日早朝の發車に投しリマ府を出つ余
の投車せしデサンパラス停車場は海面を出つる英尺四
百八十七、氣候温暖にして日々霧深く日光を見る稀なり暫
くして海上一千三百余尺、サンタクラ、に達す、霧尙多く秘
魯海岸地方の風景を失はず、此處瀛車道に沿ひ、廣大の甘蔗
園あり眼界総て蒼々、
サンバルトロメは海上殆んど五千尺の高地、停車場の傍四

五の芽屋土人支那人熱地特有の異様なる菓物を販賣す、此處に至りて天氣晴朗、山岳相含んで泉流音清く、愈登て風景益奇なり、マツカナに晝飯す、

午後流車の登る次第に高く、サンマテオ一万五百尺の高さに至り、氣候風色頓又一變す、チクラ、カサパルカを過ぎ、ラシマの長トンネルに至る頃は降雹窓を打ち、凍雪道に積む、メイグスの高峯は白雪皚々寒光に映し、四圍の山岳は寂として草木なし、寒氣厳しく空氣薄く、旅慣れぬ者は呼吸常ならざるに苦しみ、頭痛嘔氣衣を纏て椅子に横臥す、余も亦其人午前の愉快に引更へ、煙草燻る勇氣さへ出ざりき、實に是を海面を抜く一万五千七百二十二英尺安嶺西脈の絶頂流車道の最も高さ處なり、是より下り道、夕景にオロヤに着す、

即ち鐵路の終る處、新設の部落にして僅に粗製の旅館と酒店數軒あるのみ、氣分悪しければ茶を飲んで、直ちに寢床に入りしむ空氣の稀薄と氣候急變の爲め、頭痛嚴しく翌朝迄眠る能はせ

五日嘔氣頭痛其不愉快前日に譲らす、此日は氣候に慣れぬ爲め、不起不食と思案したるも、同行の英人ロイドの勧誘により朝十時床を離る、茶を飲んで暫く野外を運動、午時肉汁一椀に力を付け、乗馬一頭を雇ひ、十二時半出發す、坂を下てハツハ河に會す、木技を組て造りたる吊橋之れに懸る、渡るに橋体動搖歩を保ち難し、山腹の徑路を経て行く、地漸く高く山風凜冽、眼界寒枯、時々ヤマ(其形首長く頭少し兎馬の大さあり、馬の食せざる雜草を食して生活す、山頂草稀に而て

礦業甚だ盛なれば最も運搬に適するの動物なり)の礦石を
 負ふて過るゐるのみ、山を踰へ再ひ谷間を下り、タルマ府に
 近くに及んで、數々印度人の村落を過ぐ、彼等は石或は土を
 以て家屋を造り、屋根は瓦又は茅にて蓋ふ、其容貌と云ひ耕
 作に粗末なる木製の鋤を牛に付けて用ゆる所、何ぞ吾農民
 に類するの甚たしき、印度人種の由來、余暇尋ねんどの念此
 時に起れり、夕景タルマに達す、此近傍の溪流に沿ひ牧草麥
 黍を耕し羊山羊ヤマ等を養ふと雖ども、元來岡丘相連らな
 り、地勢險阻なれば耕作の地面は唯谷間の小部分に限らる、
 六日熟睡午前八時起床、日光映射、氣候温暖、氣分大に宜し、
 前日同伴せし秘魯人は此朝別れて獨りハウハに發す、縣吏
 に擧げられ、今回初て赴任するものあり、余の宿りし家はオ

テル、ローマと稱し、伊太利人パロニー所有の旅館なり、此人
 へはリマ府の知友より紹介書を携へしより、打解けて話せ
 り、彼は元と赤貧にて來り、巨萬の富豪家となりたることな
 きは、總て心に不足なく、唯老後の樂みに今一度故郷へ歸り
 舊知を尋ぬるの余暇を得んことを望めり、館前のプラサは
 即ち市場にして、土民地上に坐し、蜜柑、蕃菽、鶏卵、肉類を商ふ
 日曜日のこと、て頗る雜沓せり、午後獨逸人シエーメカー
 に誘はれ闘牛を見る、近邊の若衆、何か公用金募集の方便に
 催せしもの、拙技見るに堪へず、即ち中途にして歸る
 タルマはシエラ(山國)の一都會人口六千、海面を抜く一万尺
 の高地にあり、四方岡陵を繞らし、氣候風景共に病者の好保
 養場なり、主なる商法の歐洲人種掌裡にあるは今更怪むに

足らざれど、中にも伊太利人數多し。蕃菽の印度人に於ける恰も胡椒の白人に於けるか如く、食時不可欠品なり、而して之を食するの多量なる肉汁にも刺身にも焼肉にも皿毎に必ず混投す、我等の咽は焼付く程に辛きも彼等は平氣なり、斯く印度人の嗜好上一日も欠くべからざる物品なきば、何處の市場にも蕃菽は夥く陳列さる、往昔金錢の無き時代には之を以て賣買の媒介となせりと、以て其如何に彼等に必要なるかを知るへし。

七日午後三時タルマを辭しバルカに到る、此間十二哩途中谷間の狹地大概牧場に當て、山復の險往々麥黍繁茂す、バルカは山間の村落住民盡く印度人靜閑にして商賈も何もな

し、客舍粗なるも右に幽溪左に高岳、夜靜かに風清く、枕頭流聲を聞く、頗る雅趣あり。

八日ロイドの馬締鐵を打換へし爲め出發大に手間取り午前九時發す、先日来高山より低地に下り、漸く氣候の溫度を増し將に熱地に來らんとす、此日は流汗背を濕せり、相變らず連山相含んで、道路總て山腹に通す、道は晩近の開鑿、清潔にして連騎走るに可なり、諸處の橋梁皆石造の一眼橋、又一トンネルを過く、見下せば谷深く流清く、水波岩に碎けて宛ながら白布を敷く如く、見上ぐれば千丈の瀑布峻巖を衝て各其長きを競ふ、自然の風景此に至て雄偉壯烈、午後は路悪しく、數々難坂を下り夕刻ポルンの農場に達す、ポルンは同伴者の友人、余も又別に知友の紹介書を携ふ、其農場は即ち

チヤンチヤマヨ豊野の入口に位す、此夜其家に一泊久振り
 にて庭前に螢の飛ぶを見る、虫光頗る大あり
 九日此地産出の珈琲を味ふ余は珈琲の良判官をあらされは
 其善悪を確言し難しと雖ども、秘魯産は市價貴きより其優
 等なるを察せり、主人の好誼を謝し、八時辭してサンラモ
 ンに向て發す、ボルン同伴行く々其農場を案内し、珈琲甘蔗
 バナ、等培養法を説明す、途にリベルタッドなる村落を過く、
 路傍陋穢の茅屋軒を并へて列なる、擔下各々朱唐紙に「富客
 常臨」を記す馬を下て酒店に息ひ暫く涼を納る、ボルン飲み
 且つ語て曰く、此村は四十有余年の創立にかゝる支那人移
 住地なり、今彼等の多數は獨立の農家となり、中には富を致
 したるものありと、去れど年數より推考するに印度人同様

此見苦しき村落發達決して其宜しきを得たるものとは稱
 し難し、支那人は蓄積歸國の念深く人間到處青山あり永住
 産を成して天晴文明を蕃地に唱へ自國の勢力を擴張せんと
 云ふ豪氣なし、假令は堅固持久の家宅に出費を重ねんよ
 りは雨凌きの草屋に經費節減するに如すの類、即ち頭數と
 辛棒のよきにも關らず其勢力遠く他民族の盛大に及ばざ
 る所以乎
 サンラモンは嘗て兵營の在りし所、當時蕃民其以東に横行
 弓矢を以て數々良民を襲撃したるより之れを備へしなり、
 爾後蕃族漸く山奥に退き其憂なきより今は之を除けり
 サンラモンに支那人某商法を營み農具其他総ての日用品
 を販賣す、此人性來の歐洲心醉か將た商賣の計略か、店頭一

切朱唐紙を用ひせ、髪を斬り名を變し西洋流の生活を志す。此頃家屋を新築、邸後の菓園培養手を盡し清國人中珍らしき人物あり、其家に晝飯後ポルンに別れ、午後二時ラメルセッドに著し、知人の注意に従ひ、余は伊太利人某の客舎に投ず、リマ府より同伴し來れるロイド氏はペレチーに於ける秘魯會社(英國債主の組織よかゝる)移民部役員、小息後其本陣に再會を約し馬に鞭て去れり、此度山路長道中乘馬に付き一の經驗をなせり、ロイドは通常の馬余は英語にミュールと稱する兎馬と馬の雜種にして、耳長く無格好の四足獸を採りしに、馬は手綱次第何處へなりとも飛込み且つ難坂を歩むこと下手なるか故に騎者は瞬時も油斷する能ず、現に山腹の狭道を通行する際、過て前足を躓き、ロイド將に千仞

の谷底に落ちんとしたるとあり、反之ミュールは路の安危を人の氣付かざる所まで能く心得、險地を踰ゆるは彼の最も得意とする所、加ふるに歩み方小足なれば乗具合甚た樂なり、去れば此邊の人多くミュールを用ひ馬に騎るもの稀なり、銀貨二百圓上等のミュールを購ふに足る、十日朝チヤンチヤマヨ河に沿ふて下り、難坂を過ぎて人手の入らぬ樹木鬱茂する邊に出づ、木綿及びプラタノ、バ、ヨ等熱帯の菓物自然に生長す、唯た小虫の群集面部を飛廻るに苦めり、午後サンラモンに到り彼の支那店を訪ひ、農業上主人の所見を尋ね、談話數刻歸途支那人の米田に立寄る、僅かの田地を親子兩人にて耕しつゝあり、米は米國カロライナ産に同じ、路傍紅赤紫黃種々の木花其華を競ひ蜻蜒蜥蜴

の類に至る迄て其色艶なり
 十一日嘗て日秘礦業會社に關係したる獨逸人ヘレン所有の農場に至る、米人某の管理する處専ら甘蔗を植へ五十名許の人夫収獲に忙はしく二頭立ちの牛車運搬の用に供せり、昨年更に山林を開き、珈琲樹を植へ付けたるも未だ其實を結ぶに至らず、造酒場を檢し力役者生活の實況を見て歸る、午後ツルマヨ河に沿ひ、諸農場を歴訪道を過ち難路に出て夕景歸宿す
 十二日早朝發してバウカルタンボへ赴く、往々馬を牽て峻嶮を越ゆるの難澁に遇ふ、然れども數十の工夫諸處道路開鑿に従事し居たれば坦道の開通遠に非ざるべし、午時英人本營に着す即ち秘魯會社(秘魯公債證書を所持する英國人

の組合)のペネチー殖民地事務所なり、午後擔當技師の案内にて先づ網送りの仕掛にて河を渡り、新移民地へ通せんとする新道及び煉瓦製造を見、歸りて殖民課長マケンジーに會す、氏頻に土地の豊饒と廣漠を説き、日本人の移住を勸む、沃野の濶き万口の一致する處、敢て争ふべきに非ず、余は更に左の二問を起せり

問 貴社の秘魯政府に對する條約は歐洲人種を移住せしむるに非ずや

答 然り、然れども日本人にして果して移住の決心あらば、其邊決して憂ふるに足らず、宜しき取計ふべし
 問 産物運輸の方法如何

マ氏於此新調の精圖を出し論して曰く 吾輩の殖

民せんと欲するは即ち此處五十万エクタレア(一エクタレアは大凡一町に當る)の廣原ベレチー河の通する所なり、茲に珈琲を培養すと假定せよ、産物は氣笛一聲ベレチーよりウカヤリの洪流に出て、一轉亞江を経て太西洋を横さり、歐州の市場に達する甚た易し、此道一朝通するに當てり、此地の珈琲は中央亞米利加及び南米西岸の産に比し運搬上莫大の便利を得へし、何と云へば彼等はボーン岬廻航の迂遠と危険を免れされはあり、唯ベレチーニ一個所の瀑布に似たるものあり、船を通する能されは其所に鐵道を敷き、荷物運轉の便を開かんと欲し目下尙思案中なり云々

雜談數刻其殖民の口的と方法に關し大畧探知するを得たるは余の最も喜ぶ所なり、晚餐に一皿の米飯出つ、圍机の英人唯も食せず獨り余と秘魯人之に觸る、秘人余の食するを見て大に喜て曰く、噫是れ吾友あり日秘兩人其嗜好を同ふすと、元と是れ一場の戲言なりと雖ども、秘人の常に英人よりは日本人に對して同情を表するの傾あり、蓋し多少相似たる所あると、平常他の傲慢に心平かならざるものあるとに出るなり、夕景蕃族を訪ふ、手に弓矢を取り頭に羽毛を挿む、各鶯色の服を纏ひ顔を畫て漁獵之れ事とし、格別人を害するの意なきに似たり、

十三日此朝余マツケンジ一氏に説て曰く、日本の識者深く海外移民の必要を感ずと雖ども、未だ適地を發明する少し、

而して既に市哇に北米に其端緒を開きしも、多數は一時の出稼人にして嘗て資金の之れは伴はざるは本國金利の高き與て力ありと雖ども、必意邦人能く他の國情に通せざるに因らそんはあらず、殊に秘魯の如きは先きに日秘礦業會社の失敗あり、路遠く國離る、余今歸て之れを説くも却つて山師の類と見做し、敢て顧りみるものなきやも計り難し、然れども秘國の天富は古來名高く、今尙潤野漠々、千里の沃土徒らに禽獸の遊樂に任せ、其人民は溫順にして、直航せば海路又甚た遠からず、而も南米唯一の條約國なるとは、早晚世間の迷夢は醒め、日本の資金と人民か、此方角に注ぎ來るは疑ふへきに非ず、幸に貴社北米より日本農夫十人を招き、其旅費と毎月定額の賃銀を支給せば、喜て來るものあるべし

れは、到着後山林開墾の働きをなせしめ、其漸く資金を蓄積するを待ち、獨立營業の方法を授與せば、之れを見て日本よりは人は愚か資金も踵て來るならん、去すれば之れに出で、將來貴社か受くる所の利益少なからざるのみならず、移民事業の良模範を與へたるの功績は、永く日本人の記念に存せんと、マ氏答て曰く現今此殖民地に二十人の伊太利人あり、彼等は元來英人を嫌惡する故に、面倒のみにて甚た困難を感ず、依て印度より熱帶植物生長に熟達したる人民を輸入し以て殖民の基礎を建てんとも考ひ居れり、兎に角自今一年間に此事を確定の必要あれば、熟考の上答に及はんと、即ち別を告げて去る、

秘魯嘗て大に國債を英國に募集す、偶チリ國と戰爭起り、秘

軍連敗遂に盟を城下に結び、硝石烏糞の産地等國家無双の財源を割與するに及て、英國に於ける國債券所持者は頗る危ふみ、四五年前に至り種々の苦心と非常なる運動の末、漸く償却に關する條約を締結するを得る、世の所謂グレート條約是なり、當時秘魯の東部山裡の沃野を割きて、之れを秘魯會社に與へ年を期して殖民すべく、而して移住民に對する一切の租税は十年間免除すべき約束せり、余の尋ね行きしは即ち其地にして秘魯會社は結約の日より九ヶ年後に全く植民するの義務あるなり、元來茫漠なる深山猛獸著民の外通常人の住居せざる處なれば、道路の開通其他工事意外に手間取り寄集めたる移住民僅か二十人内外なるに早や已に三四年を過ぐるごとくなりぬ、加之彼の條約は秘

魯會社か秘魯國有鐵道を所有して六十年間其利益を占領し得る代り、或る場處には、鐵路延長の義務を負はしめたり、是等の事業総て巨大の資金を要する次第なり、在英國の資本家は容易に之に應ずるの出金を肯せず、爲めに内情頗る困難なるが如し、且つ已に移住したる二十名の伊太利人と英人との間柄は甚た悪しく、蔭にては互に悪口罵詈するも、必竟兩人種性質容貌を異にし自ら相容れざるものあるに因る、去れば英人の今他に移住民を求むるも人情の然らしむる處、然れども旧英人の差は、英伊人の別よりも甚たし、勿論従前の方法にては、日本人の英人管理の下に甘服業に従ふの理なし、且つ彼等の口にする東方河海を経て、歐州へ産物運送の事も、果して實行するや否や、余の之を疑ふ種々の

理由あるなり、然れども若し彼の人にして吾所説を入れ、十人を招くに決せば、之を試みんと欲せしなり、植民地には主に珈琲藍を培養せんと欲するに似たり、移住民を印度に求めば此類の農業に適するは勿論なれど、往年之を企て英政府の拒む所となり、事遂に成らざりし例もあれば、今回も如何ならんと當局者は心痛したり

英人の本營はパウカルタンボ河の此岸、一支那人の所有地内にあり、竹を并て壁に代へ、木葉を重ねて屋根とす、外面一見印度人の茅屋に等しと雖ども、内部は事務所書室寢室等総て整頓す、夜静かに虫音流聲を聞くべく詩想自ら湧出す、日中は暑く衣を重ねる能はざるも夕景は涼しく氣を安んずるに足る、浴するに清水の流あり獵するに鳥獸の群あり、

恣服羽頭の野民は異様の小舟に掉し、或は弓矢を携へて徜徉するも、溫柔害意なく、却て山河の偉觀を助くへし、家屋美ならざるも住食の樂は備はる、已にクソツケットの設あり將に玉突臺をも据付んとす、机上數箇の書類と大小の銃是吾友、英人の剛毅堅忍、而かも到る處に藪散の法を設け、數日の假住居にも安樂の術を講ずる處、支那人おそは無駄なり馬鹿氣たりなると笑へど、實は却て其妙を得たるもの感服の外なし、余滞在一晝夜厚遇と天景に甚た愉快を覺ゆたり十三日の午後はラメルセツドに在て種々の人に會したるも、余の土音に不熟なる爲め詳密の談話に困れり、偶獨逸人の寫真師にて英語に通せる者來遊しければ、其の好意に依て通辨を頼み、珈琲甘蔗園等巡遊し、歸路河に浴して數日來

の塵沙を洗ふ、此日印度人市場を開き、夕刻には各其所得を投して酒を沾ひ、酔狂の上け句喧嘩諸處に起る、傍人語て曰く彼等甚た酒を好み酔ば必ず闘ふと、其常用酒は甘蔗製にしてアルコールの精分強し、晚餐の時羽頭番面の蕃人案内亦く食堂へ入り来る、即ち之に肉片を與ふ、手摺の儘、むしやくと囃付きながら、他を見結め一語をも發せず、進化説も思當り人獸の別時に甚た難きを感せり、

十四日朝七時ラメルセツドを發しホルンの家へ立寄り、是より歸路に就くを告ぐ、主人偶山奥數里の處小流に沿ひ豊地を發見し、已に法律上の手續を經、政府の下賜を得たれば直に人夫十余人を以て、開墾の爲め之に赴むかんとす、一週間分の同勢粗食の仕度に家内繁忙に見へしか、親切にも質

問應答の時間を惜まず、農業上自家の經歷をも談じ、同伴家を出て、チャンチャマヨの關門にて分る、此日其忠告を用ひてバルカ迄到らんと決心せしに、果せるかな、途中日暮れ雨降り、不案内の山道夜陰寂寞の中に獨行す、小徑の分るゝに逢ふ毎に其何れを探るへきに迷ふ、尋ねるに人なく雨愈烈し、漸く燈光の明寂を認め初めて安堵の思せり、

チャンチャマヨはリマ府を隔る百八十余哩、アマソナス大原の一部にして、同名の河に沿ふ、地勢起伏地味豊饒、氣候は熱くして年中大差なく少く濕氣を含ひに似たり、余滞在せし時節は冬季ありしか眠むるに毛布を要せず、曉方も薄布一枚にて寒を凌ぐに足る、産物は、酒珈琲、木綿、煙草、米、玉黍、エカ及び熱帶菓物にして、最も製酒の目的を以て甘蔗を耕す

もの多し、然るも此業競争の烈しきと、秘魯珈琲の評判よきとにより、漸く珈琲培養に轉業者を増せり、木綿は総て高さ一丈許りの木に生し其質最良と稱す、往々原野に自然生長するを見たり、煙草は質悪しきに非ざるも大園に作するものなく唯印度人の隨意培養するのみ、若し経験家の來て改良を施すあらば、大に此業を發達するを得へし、米は支那人の耕作に掛る運送不便を以ては近傍の需用に應ずるを以て足れり、とす從て廣田絶てなしと知るべし、玉黍及びユカは大概每家之れを作る、前者は牛馬を養ひ後者は住民の常食其性質芋に類す以て糊を製するを得、鳥と花は熱地の特色總て艶麗、ブリサードは北米に見たると同じく藍色にして紅頭、リマ府の黒鳥と似て非なるものなり、森林多き

か故に蚊夥しく、而蝨と蟻の形大なるは、數々吾が注意を喚起せり、住民の數は確知し難しと雖も、二三百の間ならん、多數は伊太利人にして佛獨之れに次く、大概初めは秘政府の費用にて歐洲より渡航し、着後はリマ府に於る殖民協會より土地農具獸類金圓等を給され、其指圖を受て耕作し漸く一家を成せし者なり、余暇飲酒僅に其氣を散し、日々生存競争の繁務に汲々す、富豪家尙未だ多からされは、此の沃野開墾の區域も唯沿流の狭地に限られ、茫漠たる殘余の廣原は徒に森林蔚陶絶て人跡なし、蓋し將來屬望の地なり、珈琲は地質に適するか故、現に培養しつゝあるものは愈其畑を擴げ、未だ一度の経験なき人は新に栽植せんとす、珈琲は元と歐洲金貨國へ輸出を以て目的とするとなれば、晩近

銀貨の下落は益々他を棄て之に移るの利あるを確めたり、
左に記す所は此地實驗家の説明による

百メートル四方の地面に珈琲樹三千本を培養すべく、
三年後に毎樹二磅の珈琲を得へし、労働者の日給四
十仙乃至六十仙也(食事自辨)而して雜草を除き或は其
地の手入れに年中人夫一名を要す、収獲費用百磅又付
五ソール、摘採り時節は五月に始め八月に終る、

珈琲百磅の時價

チヤンチャマヨにて

二十二ソール

タルマにて

二十四

カヤオ府にて

二十八

十五日夜來の降雨正午初めて遇む、山中の村落雨具を得難

く天晴るゝを待てバルカを出て四時頃タルマに達す、

十六日タルマタンポにインカ宮殿の古跡を尋ぬ、西班牙人
未だ南海に至らざる以前、都を今の秘魯クスコに構へ南米
の西南を征服し以て一大帝國を建て、夙に文明を唱道した
る時を稱してインカ時代と云ふ、當年の宮殿土器の存する
もの多く、此の遺跡の如き屋宇既に破壊したるも石壁は依
然存在す、インカ在世のときは壯大の建築なりしと察せら
る、

十七日馬を休め且つ新たに蹄鉄を打たしむ、諸人と會談終
日家を出てす

十八日午後タルマを出發し、途へ往古人民穴居の跡を尋ね、
漸く登て山頂に達す、呼吸常ならずも前回程烈しき頭痛

を感せず、四顧するに高山起伏、雪を攀んで草を見ず、
十九日午前六時四十五分オロヤ發の瀛車に投し、チクラに
晝飯す、昨來同伴の醫士某已に數回の登山を経たりと稱す
るも、尙頭痛嘔吐に困難す、新參の予は却て其の看病人たり、
此の鉄道長さ百三十六哩カヤオ港海上八尺の低地に起り、
漸く壹萬五千六百余尺の高さに登り、オロヤ一萬二千百七
十八尺の所を終る、其間五十六のトンネルと、數多の橋梁、建
築の困難推知するに余りあり、四時リマ府に着す

日本國秘魯國修好通商航海假條約

明治六年(西歷千八百七十三年)八月二十一日
於東京調印明治八年(同千八百七十五年)五月
十七日批准書交換

日本國、大皇帝と秘魯國、大統領と方今幸に兩國間に存
する平和懇親の交誼を永久堅固ならしめ且兩國人民の貿
易を容易ならしめんとを欲するにより其須要の目的を以
て條約を結ばんとを、決し各其全權を命せり即ち日本國
大皇帝は外務卿副島種臣を全權に命し秘魯國、大統領は
日本及び支那への秘魯國特派全權公使ポスト甲比丹オー
レリオ、ガルシヤ、ワイ、ガルシヤを全權に命し各其委任狀を
示し其相當なるを察し且凡て日本よて取結たる條約は本

年改正に取懸るを以て右改正ある迄日本政府に於ては他の國々と同様なる交誼を秘魯政府と修めんとを欲し兩國の利益を保全せんかため和親貿易航海の假條約を結ひ之に記名調印せんとを約諾し左の條々を決定せり

第一條

日本國 大皇帝は後嗣後裔及び共和政秘魯國並に兩國人民の間に永世平和懇親の交誼を存すへし此條約を取結へる兩國の領内に於ては互に其人民の身體及所有物の爲め十分の保護を受へし

第二條

日本國 大皇帝は利馬府に在留せしむるためデプロマチック、エゼントを命し得へし又他國のコンシユラル官吏在

留するを許せる秘魯の諸港及び市中をコンシユル、ゼチラル、コンシユル或はコンシユラル、エゼントを命するとを得へし
右官吏は何れも最優待せらるゝ國の官吏と同等の權利及び殊典を有し秘魯國の諸部を勝手に旅行するの權あるへし
秘魯國 大統領は日本帝國の都府に在留せしむる爲めデプロマチック、エゼントを命するとを得又外國貿易のため既に開き又此後開くへき日本の諸港及び市中に在留するためコンシユル、ゼチラル、コンシユル、或はコンシユラル、エゼントを命するとを得へし
右官吏は何れも優待せらるゝ國々の官吏と同等の權利殊

典を有すへし且秘魯國のデプロマチック、エゼント及ひコンシユル、セテラヨルは日本帝國の諸部を勝手に旅行するの權あるへし

第三條

日本に於て外國人民又は其交易のために開き又此後可開諸港及び市中を此條約施行の日より秘魯國民及び其貿易のために開くへし依て秘魯國民は右場處に居住し其船を以て其所に至り貿易するを得且最優待せらるゝ國の人民と同等の權利殊典を有すへし
日本人民は秘魯國何れの所にても居住し得へく且其船を以て外國交易の爲め開きたる凡ての港に至るとを得秘魯に於て最優待せる國の人民に與ふるものと同等の權利殊

典を有すへし

第四條

若し秘魯の船日本の海岸にて破船し或は漂着し或は難を避け已を得ず日本の港内に入り來るとありて相當なる日本の官吏之を聞かば直に力の及ぶ丈扶助を與へ其船中の人々を懇切に取扱ひ要用あるときは其人々を最寄の秘魯領事館へ送るへき方便を與ふへし
秘魯海岸に於て破船或は漂着する日本船へも秘魯海岸取締の官吏より前同様の扶助を與ふへし

第五條

日本各開港場に於て外國交易規則として方今施行する輸出入税額は秘魯との交易に適用すへし

秘魯諸港に於て日本人の輸出入する貿易に付ては他の最優待せらるゝ國との貿易に付て取立る税額の外に出てす又之に上らざるへし

第六條

秘魯國政府其官吏及人民此條約を施行する日より日本國大皇帝にて他國の政府其官吏及人民へ既に與へ或は此後可與總ての權利殊典特例裁判の權其他總ての利益を受へざるとを特に茲に明述す
右同様日本政府其官吏及び人民は秘魯國に於て最優待せる他の政府官吏及人民に與ふる總ての權利殊典特例を受へし

第七條

日本人民及び秘魯人民は相互に法に適合する諸役に用ひ又は用ひらるゝ事に付兩國政府之を妨げざるへし且各其國法に於て要する手数を經て往來すると勝手なるへし

第八條

日本政府條約改定の期に及ばし共和政秘魯國とも和親貿易航海の條約を取結ひ而して此假條約は廢止すへし

第九條

此條約は日本文三通西班牙文三通英文三通合九通に認め記名すへし其文意は各同文同義なりと雖ども文意に付議論生ずるとあらは英文を以て原文と見るへし

第十條

此條約は日本國大皇帝之を批准し又共和政秘魯國大

統領は秘魯國會にて許諾せし後之を批准し本書の成丈け
速に東京に於て交換すへし
此條約は本月より施行すへきを約定す
右證據として双方の全權此條約に名を記し印を鈐する者
也

明治六年八月二十一日

千八百七十三年八月二十一日

於東京

副 嶋 種 臣 印

オーレリオ、ガルシヤ、ワイ、ガルシヤ印

10/24

明治廿七年十月廿日印刷
同 年同月廿五日發行

非賣品

著 者
兼 發 行 者

千葉縣夷隅郡大多喜町

青柳 郁太郎

印 刷 者

東京市本郷區天神町一丁目十三番地

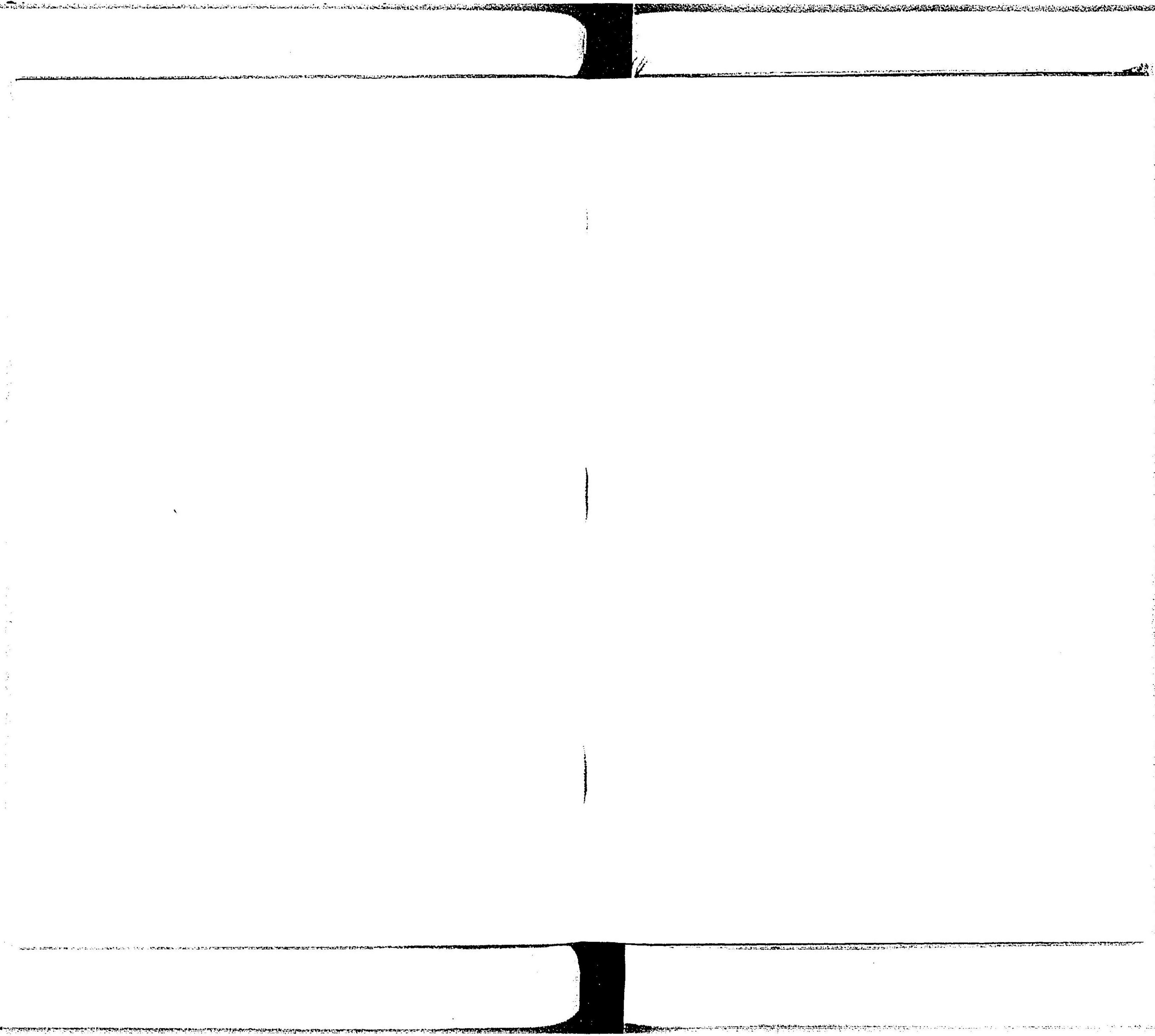
關 阜 作

印 刷 所

東京市本郷區天神町一丁目十三番地

博 文 閣





18

516

Ⓜ

026958-000-7

18-516

秘魯事情

青柳 郁太郎 / 著

M27

ADG-0083



